

# 海のまぼろし

小川未明

青空文庫



浜辺はまべに立たつて、沖おきの方ほうを見みながら、いつも口笛くちぶえを吹ふいている  
若者わかものがありました。風かぜは、その音ねを消けし、青あおい、青あおい、ガラス  
のようそらな空そらには、白しろいかもめが飛とんでいました。

ここに、また二人ふたりの娘むすめがあつて、一人ひとりの娘むすめは、内気うちきで思おもつたこ  
とも、口くちに出だしていわず、悲かなしいときも、目めにいつぱい涙なみだをため  
て、うつむいているといふうでありますから、心こころで慕したつてい  
た若者わかもののいうことは、なんでもきいたのであります。

「その指ゆびにはめてい、指輪ゆびわをくれない？」と、あるとき、若わかも  
者ものがいいました。

彼女かのじよは、ほんとうに、若者わかものが、自分じぶんを愛あいしているので、そ

ういったのだらうと思つて、指にはめてある指輪をぬいてやりま  
した。それは、死んだお母さんからもらった、だいじにしていた  
ものです。

その後のこと、あるうららかな日でした。

「こんど、遠い船出をして、帰ってきたら、結婚をしようと思  
っているが、だれか、約束をしてくれる女はないだろうか。」  
と、若者がいいました。彼女は、もとより驚きました。そし  
て、恥ずかしさのために、ほおを赤くして、うつむいていたので  
あります。

彼女にくらべて、友だちの娘は、平常、はすつぱといわれ  
るほどの、快活の性質でありましたから、これをきくと、す

ぐに、

「私が、お約束やくそくをいたします。勇ましい、遠い船出ふなでから、あなたのお帰りかえなさる日ひを、氏神かみさまにご無事ぶじを祈いのつて、お待ちまちします。」といいました。

こう女おんなにいわれて、喜よろこばぬ男おとこはなかつたでありましょう。若わかも

者は、大いにはしやいで、このあいだもらつて、秘蔵ひぞうしていた

指輪ゆびわを、その娘むすめに与あたえ、指ゆびにはめてやりました。そばでこれを見み

たときは、いかに、おとなしい娘むすめでも、さすがにそこにいたたま

らず、胸むねを裂さかれるような気持きもちちがしたのです。

遠い水平線とおいすいへいせんは、黒くろく、黒くろく、うねりうねつて、見みられました。

空そらを血潮ちしおのように染そめて、赤あかい夕日ゆうひは、幾いくたびか、波なみの間あいだに沈しずん

だけれど、若者の船は、もどつてきませんでした。はすつぽの娘は、はじめのうちこそ、その帰りを待たけれど、生死がわからなくなる、はやくも、あきらめてしまいました。なぜなら、秋から、冬にかけて、すさまじい風が吹きつづいて、沖が暴れ狂ったからでした。彼女は、いつしか、他の青年を恋するようになりました。

「その指輪は、だれからもらつたのか。」と、その青年は、問うたのであります。いつか、約束にもらつた指輪は、いまはかえつて、邪魔となつたのでした。彼女は、顔を赤くして、指輪をぬくと、海の中へ投げてしまいました。

「これで、いいのですか。」

かれらは朗らかに笑いました。内氣の娘は、その後も、浜辺に  
 きて、じつと沖の方をながめて、いまだに帰つてこない、若者  
 の身の上を案じていました。しかし、何人も、彼女の苦しい  
 胸のうちを知るものがなかつたのです。北国の三月は、まだ雪  
 や、あられが降つて、雲行きが険しかつたのであります。あわれ  
 な娘の兄は、こうした寒い日にも、生活のために、沖へ出て漁  
 をしていました。ちらちらと、横なぐりに、雪は、波の上に落ち  
 ると、たちまち消えてしまいました。ふとそのとき、水の底に、  
 茫として、怪しい影のようなものが見えたのであります。  
 「なんだろう？」と、彼が、瞳をこらすと、破れた帆を傾けて、  
 一そのの、難破船が、水の中を走つていたのです。

「あ、船幽霊だ！」と、叫ぶと、ぎよつとしました。

「なんだか、気味が悪いし、もう引き上げよう。」といつて、わずか二、三びきしか釣れなかつたたらをかごにいれて、兄は、家へもどつてきました。

たらの色は、黒々として、大きな目玉が光つていました。娘

は、その一びきを晩のさかなにしようといふ。庖丁をいれました。魚の肉は、雪よりも白く、冷たかつたのです。そして、腹を割ると、真っ赤な、桃のつぼみが出たと思ひました。

「どこで、桃のつぼみを、のんだのだらう。」といつて、娘は、つまみ上げてから、「まあ！」と、目をみはつたまま、ふるえ出したのでした。それは、永久になくしてしまつたと思つてい

た、お母<sup>かあ</sup>さんの形<sup>かた</sup>見<sup>み</sup>の指<sup>ゆび</sup>輪<sup>わ</sup>でありました。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「海《うみ》のまぼろし」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年2月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 海のまぼろし

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>